Ⅰ　推定第一次内裏地区の調査（第117次）

平城宮の中央、朱雀門の北方地域は推定第一次内裏・朝堂院地域と呼ばれている。ここは平城山丘陵の末端に位置し、宮内でもとくに高燥な地域である。今回の調査地区は丘陵末端部が削平され、北側と大きな段差がつく。調査地区自体は南にゆるやかに傾斜し、そのほぼ中央部には、南北に奈良時代の築地痕跡と考えられる高さ約1.5 *m*の土塁が連なる。土塁を境に東側が6ABD－C地区、西側が6ABQ－A地区である。

調査区の土層は耕土・床土が覆い、東側の部分では遺構面は削平され、直接花崗岩媒乱土の地山となる。西側は東側と同じ地山の上に2層の礫層がある。これは整地土である。北側ではこの2層の礫層の間に黄褐粘質土の整地土が存在する。調査区の南側、第27次調査地区と接する位置では、地山は粘土層となる。

第一次内裏地区は1965年の第27次調査以来、今回を含めて8次の調査を重ね、今回で東半部の調査は終了した。

遺　構

今回検出した主要な遺構は、塼積擁壁・石積擁壁・築地回廊・築地・土塁・建物2棟・塀3条・井戸1基・溝8条・斜道・礫敷広場・足場穴・土坑等である。

第一次内裏地区は区画の変遷から3時期に大別される。時期別に述べる。

A期　この時期の遺構には塼積擁壁SX6600・礫敷広場SH6603A、築地回廊SC5500A・B、塀SA3777、斜道SF9232A、溝SD3767A・B、3790A・B、9224、足場穴SX3795A・B、礫敷遺構SX9229、穴SX9225がある。

この時期には第一次内裏の東面は築地回廊・塀で区画される。築地回廊SC5500は雨落溝SD3767・3790、足場穴SX3795によって復原できる。両雨落溝には上下2層ある。東の雨落溝SD3767は素掘であるが、西の雨落溝SD3790は石敷溝で、上層は西縁に礫を並べて砌としている。下層は上層より礫の粒が細かい。足場穴SX3795も、東の雨落溝SD3767の下層を切り込むものと上層を切りこむものの2者がある。このことより、築地回廊SC5500は建て替えが想定できる。

溝ＳＤ9224は築地回廊基壇の掘込み地業である。第41次調査のＳＸ3800に対応するものであろう。ＳＸ9225は築地回廊の礎石裾付の根石であろう。

塀ＳＡ3777は今回11間分検出した。柱間は約4.6ｍ等間で、調査区のほぼ中央で１間分欠け、出入口が想定できる。柱掘方は約1.2ｍ×１ｍの長方形を呈し、柱の位置を一段深く掘るものもある。深さは現状で最大1.3ｍを測る。掘方の埋土は版築的で非常に強固なものである。柱は抜き取られずに、当時の地表面で切りとられたものであろう。柱根・空洞を残すものがある。

第27・41次調査の所見を加えれば、Ａ期の中で東面の区画は築地回廊→塀→築地回廊の変遷が認められる。

塼積擁壁ＳＸ6600は第87次調査で南へ翼状に張り出すことが確認されていた。今回の調査で、築地回廊に直接とりつくのではなく、南へ約15ｍ張り出した位置で南折し、約15ｍ南で平坦面にとりつき、築地回廊との間約15ｍは斜道ＳＦ9232Ａとなって北側の壇にとりつくことが確認できた。塼積擁壁の塼は大部分取り除かれていたが、基底部の１・２段を部分的に検出した。ＳＸ6600の前面は厚さ約10㎝礫を敷いた礫敷広場ＳＨ6603Ａとなる。礫敷ＳＸ9229は築地回廊の西側雨落溝上層ＳＤ3790Ｂと一体となる粒ぞろいの礫敷である。

Ｂ期　この時期の遺構には、石積擁壁ＳＸ9230、礫敷広場ＳＨ6603Ｂ、井戸ＳＥ9210、建物ＳＢ9220、斜道ＳＦ9232Ｂ、柱穴ＳＸ9223、塀ＳＡ9228、土坑ＳＫ9231、溝ＳＤ9236、築地回廊ＳＣ8360がある。

この時期には塼積擁壁ＳＸ6600が埋め立てられ、約20ｍ南に石積擁壁ＳＸ9230が築かれる。ＳＸ9230は基底部の一部とその抜取穴を検出した。斜道ＳＦ9232Ｂは傾斜をゆるめて存続する。ＳＸ9230の前面約20ｍは黄褐粘質土で整地され、その上に礫を敷き、再び礫敷広場ＳＨ6603Ｂとなる。整地と礫敷の間には後述のように若干の時間差がある。

建物ＳＢ9220は斜道ＳＦ9232Ｂが平坦面となる位置に建てられる。ＳＢ9220は桁行５間、梁行３間、８尺等間の北庇をもつ東西棟建物である。柱掘形は約１ｍ×１ｍで、深さ約60㎝を測る。この柱掘形は黄褐粘質土を切り込むが、柱の抜取

り穴は上層の礫敷を切り込む。上層の礫敷は建物位置全面に敷かれるため、SB9220は壁体をもたない吹放しの構造と考えられる。

井戸SE9210は発掘区の西端中央部、石積擁壁SX9230から約30m南に位置する。掘形は東西8m・南北7mの巨大なもので、東と南に段をもち、二段の掘形である。二段目は約5m四方である。掘形の深さは約4mある。掘形は青灰色粘土でうめられる。井戸枠は現存4段、高さ約80cm、内法約2.3mの宮内最大のものである。下から板・校木を交互に組む特異な構造である。井戸枠のそれぞれには番付が付される。校木は校倉の転用材で、風蝕がみとめられ、校倉の時の仕口をも残す。井戸枠は当初20段以上あったものと推定できる。

土坑SK9231はSB9220の南にある土坑で、塼が多数出土した。柱穴SX9223は北へ20尺とると第87次の根石と対応するため、この時期の門と推定できる。塀SA9228も、門の目隠塀としうる。この時期の築地回廊SC8360の痕跡は本調査区では門以外検出していない。溝SD9236は幅1mの石組溝で現存6mをはかる。石は大半抜き取られている。

C期　C期は2期に分れる。C_1期には築地SA3819A、溝SD8226・土塀SA7130があり、C_2期には土塁SA3819B、塀SA8238、溝SD8237・8239、建物SB9213・土坑SK9211・9213・9214・9215・9226・9233・9234・9235・9236がある。

C_1期は築地SA3819Aで東面が画される。築地の版築は北側では地山上約5cm残るだけであるが、南側では約50cm残存する。溝SD8226は築地SA3819Aの西雨落溝で、調査区の北端では軒瓦と礫で両肩を護岸する。東西塀SA7130は井戸SE9210の北側に構築される。今回の調査で13間分検出した。柱間は10尺等間、井戸の部分では14尺、築地には7尺で取りつく。

C_2期は築地が土塁SA3819Bに改作される。積土は版築の行われた形跡はなく、非常に粗くつまれる。最大幅約3mを測る。土塁SA3819Bの東約18mの位置に、さらに南北塀SA8238が構築される。溝SD8237・8239は東西両側の雨落溝である。土塁SA3819Bと塀SA8238の間に桁行3間、梁行2間の南北棟建物SB9213が建つ。SB9213の柱穴は小さく、仮設的な建物である。土坑からは多数の瓦

が出土している。

その他　時期を明確にしがたい遺構も存在する。築地中央部断ち割り部分で検出した2条の平行した浅い溝SD9219・9221は溝間1.5 *m*を測る。築地もしくは築地回廊の築地部分の版築の際の堰板の痕跡と考えられる。

SB9218は桁行2間、梁間1間。SB9216は桁行4間、梁間1間で桁行9尺、梁行10尺の柱間である。SB9216は塀SA3777の掘形を切って建てられる。これらは掘形もしっかりせず、仮設建物か足場であろう。築地南の断ち割り部分で3間分検出した南北塀SA9217は土塁の積土に覆われ、築地の版築を掘り込む。築地北端の断ち割り部分で1間分検出した南北塀SA9222は築地の版築土に覆われる。南の柱穴から軒平瓦6732が出土した。これらの塀も仮設的なものであろう。

遺　物

今回の調査で出土した遺物は瓦・塼・土器・金属器・木器・木簡があるが、出土量はきわめて少い。

瓦は塼積擁壁SX6600を埋めた所から平城宮第Ⅰ期（和銅元年～養老5年）の瓦が出土した他は、第Ⅲ期（天平17年～天平勝宝年間）の瓦が多数を占める。塼はSX6600の前面と、土坑SK9231から多数出土した。

土器の量はきわめて少い。このことは今回の調査区が一貫して広場であったことによる。井戸SE9210からは10世紀代の土師器が出土し、井戸の抜取穴からは11世紀代の瓦器が出土した。

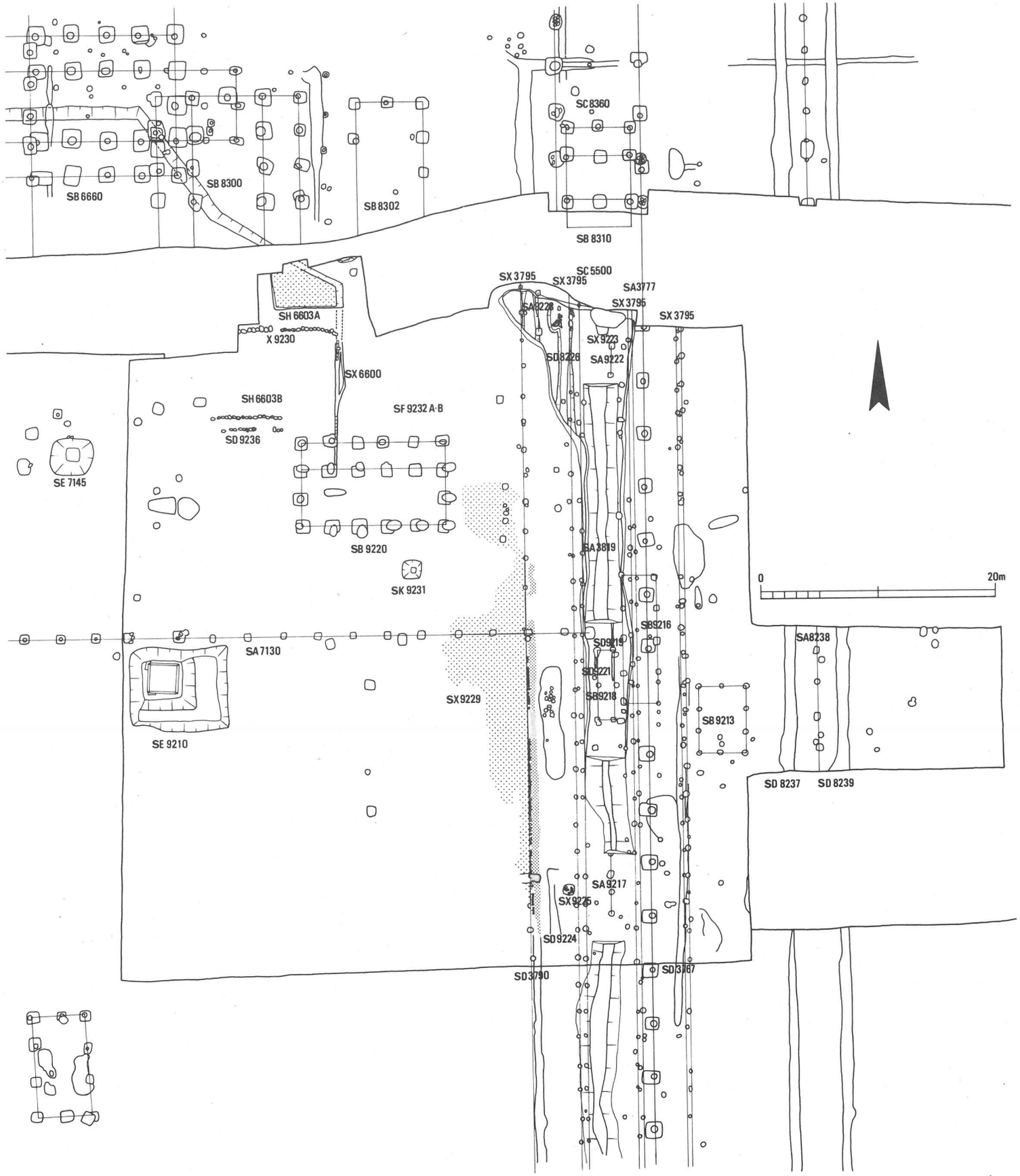
金属器は井戸の抜取穴から鎌が出土した。

木器は井戸から櫛・曲物等が出土した。

木簡はSE9210から1点出土した。長さ27.8 *cm*のしきみの枝を細かく面とりし「道請□□」「道□　」等を記載している。

ま　と　め

今回の調査で第一次内裏地区東半部の調査は終了し、この地区の全貌をほぼ明らかにすることができた。従来からの調査成果をふまえてこの地区全体を概観し、まとめとする。

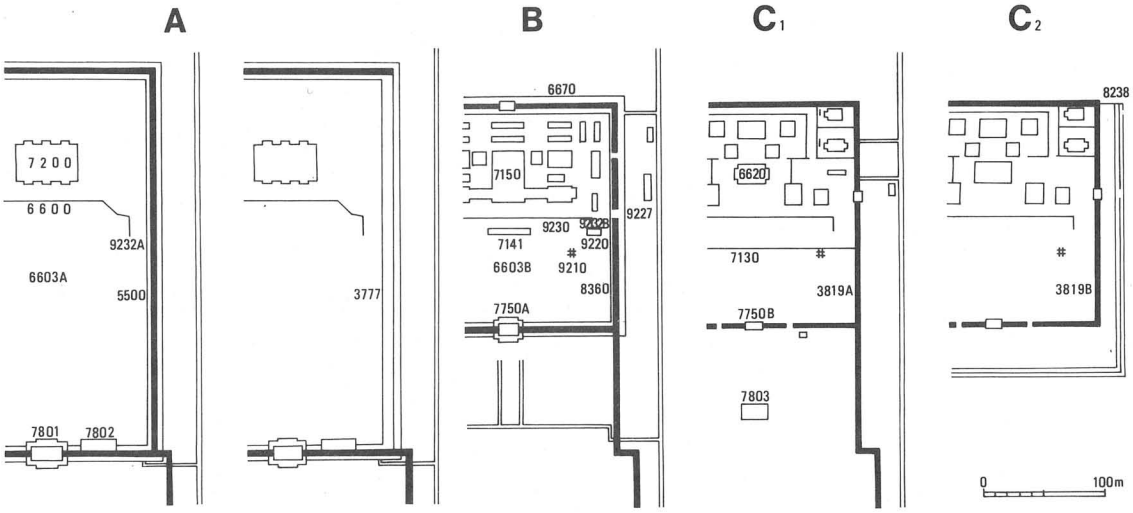


第1図　第117次発掘遺構図

A期（和銅～天平勝宝末年）　南北1080尺、東西600尺の南北に長い区画で画される時期である。南面中央には巨大な門ＳＢ7801が建てられる。北から約$\frac{1}{3}$の位置に高さ約３ｍの塼積擁壁ＳＸ6600をもつ壇が設けられる。壇は直接築地回廊にとりつかず、両側に約15ｍの斜道を形成する。壇上には巨大な建物ＳＢ7200が建てられる。壇の前面は門まで全面に礫敷広場ＳＨ6603Ａとなる。広場には井戸ＳＥ7145一基が掘削される他には遺構は存在しない。

この地域を区画する築地回廊は梁行24尺に復原でき、柱間は約4.6ｍ等間で東面は68間分に推定しうる。東面の築地回廊は一時塀ＳＡ3777に建て替えられる。ＳＡ3777は約4.6ｍ等間で67間分ある。塀の柱位置は第27・41次調査での根石の残存状況、足場穴との配列からみて、築地回廊の柱位置の中間にあたる。今回の調査区のほぼ中央と第87次調査でそれぞれ１間分柱が欠ける場所があり、出入口と考えられる。ＳＡ3777は柱位置等、当初の築地回廊に規制されているため、この出入口は当初の築地回廊の門の位置を踏襲したものとも考えられよう。

ＳＡ3777は後に廃される。この柱穴を切る暗渠が存在するため、再び築地回廊が構築されたと考えられる。２層ある雨落溝や新旧の足場穴もこれに対応するものであろう。門ＳＢ7801の東に、後に楼風建物ＳＢ7802が建てられる。なお、今回の調査では当初の基幹排水路ＳＤ3765は検出されなかった。削平を受けたとは



第２図　推定第１次内裏地図の変遷

考えられないので、発掘区以南で東折しているものと考えられる。

B期（天平宝字～奈良末）　この時期にはA期の区画が南北それぞれ切り縮められ、南北630尺・東西600尺の区画となる。

A期の塼積擁壁を埋めたて南北のほぼ中軸線上に石積擁壁SX9230を構築する。擁壁前面は門SB7750Aまで礫敷広場となる。壇上は正殿SB7150を中心に、10尺方眼で割付けた整然とした殿舎の配置をとる。壇の下には中軸線上に6間×1間の特殊な建物SB7141と、斜道SF9232Bが広場にとりつく位置に構築されたSB9220以外に建物はない。この2棟は北側の柱筋が合う。またSB9220は北庇をもち、壇上の建物群に対する意識が濃厚であり、壇上と壇下の空間利用の違いを示している。石積擁壁SX9230から約30*m*の位置に井戸SE9210が設けられる。

この時期の区画も築地回廊で、梁行はA期と変わらず12尺である。北面SC6670は根石から43間分想定でき東面SC8360とともに柱間は約4*m*である。北から11間目に15尺の門があり、北の門から11間目に20尺の門SX9223が想定できる。検出した柱穴は南側だけであるが、石積擁壁に中心をそろえる。この南側には根石の残存は認められない。しかし、SX9223以南は北側と同じ柱間で割り付けると端数が生じる。SX9223を境に北と南で柱間が異なる可能性がある。

C期（奈良末～平安初頭）　この時期の区画はB期を踏襲する。この時期は大きく2時期にわけられる。

C_1期には築地回廊が築地に改作され、門SB7750Bの規模が小さくなる。石積擁壁は存続する。壇上の建物配置は大幅に変わる。正殿SB6620を中心に塀による仕切を多用し、内裏的な様相を示す。壇下は依然広場である。南門外には大極殿規模の建物SB7803が建つ。井戸SE9210は存続し、北側は塀で区画される。

C_2期には築地が土塁にかわる。その外側には塀が構築され、二重に区画される。壇上の建物配置はC_1期と変わらない。この時期は、平城還都時か、平城天皇第三皇子高岳親王に平城旧宮を賜わった時にあてうる。SE9210の底から10世紀代の土師器が出土し、井戸枠の抜取穴からは11世紀代の瓦器が出土している。これはこの地域の終焉の時期を示し、水田化された時点を示すものである。